

聖 書：マタイ 6:34

説教題：明日のことは明日が

日 時：2018年10月7日（朝拝）

マタイの福音書6章の最後の節となりました。先週はその前の33節を見ました。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」これは全聖書の中でも最も有名なみことばの一つ、そしてこの前後のクライマックスをなす言葉と言えるかと思います。そういう意味では、これに付け足す言葉はもうないと思われるかもしれません。かえって言葉を足さず、33節で止めておいた方が良いと。しかし今日の34節を蛇足と考える人はいないと思います。33節はもちろん珠玉の御言葉と言って良いと思いますが、今日の34節も決してそれに劣らない宝石のような言葉だと考える人が多いのではないでしょうか。

この34節のテーマは「明日のための心配」あるいは「明日」という言葉に代表される将来全体に対する心配です。私たちは33節を読んで、こう思ったかもしれません。神の国と神の義をまず求めて生きるということは、それはそれで良い。しかしそれで明日は大丈夫なのか。今日このことに集中して取り組むあまり、明日突然生活が破綻することはないのかと。イエス様はここで将来のことは何も考へるなと言っているわけではありません。将来について計画したり、準備することは当然必要です。神もこの世界に対する計画を持ち、そのために準備される方です。ですから神のかたちに造られている私たちも、将来について考へ、備えることは正しいことであり、また必要なことです。しかし私たちは往々にして将来について考へたり、準備する際に「心配」も一緒にしてしまう。それが禁じられているのです。特に今現在の状況が思わしくない時、余計将来に関して思い煩いがちになります。「今、こんな調子なら、明日はどうなってしまうことか。」「一年後はどうなっていることか。」また「10年後は？20年後は？30年後は？」、「などと。そういう心配はやめなさいとイエス様は言われます。なぜかと言うと、それは「明日のことは明日が心配するから」とあります。これはどういう意味でしょうか。今日は心配しないが明日になつたら心配するという意味でしょうか。そうではありません。明日になってこの御言葉を読めば、そこに「明日のことは明日が心配します。」と出て来ます。ですからその日は何も心配しません。さらにその次の日にこの箇

所を開いて読んでみても、やはりそこには「明日のことは明日が心配します」とありますから、その日もまた私たちは心配せずに過ごします。つまりこうして「明日」という日は永遠に私たちにところに来ないのです。私たちは明日という日をこの時間に生きることはできません。ですから実際には少しも生きられない明日のことを思い煩って今を無為に過ごすより、今日自分のできることに集中して取り組む方が賢明です。

これと似た一般のことわざに「明日は明日の風が吹く」というのがあります。辞書で意味を調べると「先のことを案じても始まらないで、成り行きに任せて生きる方が良いということ」とか、「明日のことをくよくよ心配しても仕方がない。励ましと開き直りの意」などとありました。私たちは自分の頭の中で色々なことを考えて気を動転させがちですが、明日にどんな風が吹くか、私たちには分かりません。私たちはしばしば最悪のケースを考えて不安で一杯になりやすい者ですが、それとは全く違った風も明日には吹き得るのです。それなら、どうなるか分からることのために今日の限られたエネルギーを消費するよりも、今日できること、また今日すべきことに集中した方が絶対に得策です。世の中の多くの成功した人たちは、この考え方においてすぐれていた人たちはくべきよ考えて過ごしたくなるところを、その気持ちを払い除け、とにかく今日できることへと向かって行った。そして肯定的な何かに集中して取り組んで行った時に、その心配はいつのまに小さくなつて行ったのでしょうか。彼らの頭をよぎつた最悪のケースは、その通りには起こらなかつたという場合がほとんどだったのでしょうか。

さて、では今日の御言葉は、このことわざと同じことを語っているだけなのでしょうか。イエス様はこの世の人たちも見出した真理を、彼らと同じ地盤に立って語られただけなのでしょうか。言うならば人生訓、あるいは心理学的な洞察を述べられただけだったのでしょうか。そうではないでしょう。では決定的な違いはどこにあるでしょうか。それは 34 節最初の「ですから」という部分です。このイエス様の言葉はこれまでの言葉を受けて語られたものです。ですからこれまでの話とのつながりの中で、この御言葉を理解して行かなくてはなりません。

そのことを考慮すると、どのように違つて来るでしょう。「明日は明日の風が吹く」ということわざが言わんとしていることは、「明日はどんな風が吹くか分からぬから、先走った心配はやめよ。そして成り行きに身を任せよ。」ということでしょう。ここにある世界観・人生観は、一言で言えば運命論・宿命論です。人間はそれには逆らえないから、明日吹く風に身を委ねて、その中で自分の最善を尽くす。それ以上のことはできないという考え方です。確かにこれはずっと心配して過ごすよりはるかに良い考え方とは言え、これではどうして心配する人に本当の慰めを与えることができるでしょうか。落ち込む人はたいてい最悪の状況を思い浮かべて悩みがちですので、それよりはまだましの風が明日吹くだろうということは期待できます。80%、90%の確率で最悪の状態には至らないでしょう。しかしだからと言って、絶対そうならないという保証はどこにもありません。もしかすると明日は今日よりもっとひどい風が吹く可能性もあります。次の日には台風どころかハリケーンになるかもしれません。そういう運命のいたずらの中で人間は翻弄されるしかないと考えるなら、一体その人はどのようにして心からの平安を持てるでしょうか。

それに対してイエス様の34節の言葉は「ですから」という岩の上に立っています。これまでイエス様が述べて来たことは、神が天から私たちを養つていてくださるということでした。一人一人の人生に目的と計画を持ち、それが全部実現されるまで守り導いてくださるお方が天におられる。そういう父なる神を見上げ、信じているなら、明日のための心配は無用であるということです。運命には逆らえないから、明日のことは心配してもしょうがないと開き直り、ある意味であきらめの境地に立つのではなく、あるいは漠然とした根拠のない期待を持つのではなく、私たちのことを心にかけ、一人子さえも与えてくださった父なる神の愛とその全能の御力を信頼し、お委ねする。だから明日についても心配はいらない。明日のことについては明日も私たちのことを心配してくださる神の大きな愛の御手にお任せすれば良い。ですから私たちとしては今日、自分が何に心を向けて歩むかということを大事にし、そのことに専心して取り組めば良いということになります。

34節最後にある言葉も私たちの理解を大いに助けてくれます。「苦労はその日その日に十分あります。」イエス様はここで何と言わたでしょうか。信仰があれば困難は

なくなると言われたでしょうか。神の国と神の義を求めれば、信仰者が歩む道はバラ色で安樂に満ちたものになると言われたでしょうか。そうではありませんでした。「苦労」は十分にあると言われています。この「苦労」と訳されている言葉は原文では「悪いもの」という意味の言葉が使われています。人間にとって良くないもの。トラブルになることです。本来、人間の生活にこのようなものはありませんでした。しかし人間が罪を犯した結果、このような悪い事柄が入ってきました。墮落後にアダムは「顔に汗を流して糧を得なければならない」と言われたように、日々の生活には「苦労」という要素が入ってきました。この世にある限り、私たちはこの「悪いこと」とお別れすることはできません。絶えずそれが私たちの生活にはあります。もちろん神はイエス・キリストにある恵みによって、それに打ち勝ち、乗り越える力を私たちに下さるのではあります。

とするとここで言っていることは何でしょうか。それは今日一日を生きるだけでも苦労は十分あるのに、今日の分に加えて明日の苦労まで一緒に考え、計算したら、私たちはつぶれてしまう！ということです。そうすることによって、明日のことを心配しなければ今日取り組めたはずのこともできないままにしてしまう。こうして「できない」「できない」ということがどんどん高く積み上がっててしまう。これは危険なことです。このように一日分以上を背負おうとしたら、私たち自身が壊れてしまうのです。ですからイエス様が言っていることは、明日以降のことを今日のうちに負おうとせず、今日は今日のことにだけ集中すべし！ということです。今日はそんなにやることがないから、今日のうちに明日の分までというような余裕は私たちにはない。苦労はその日その日に十分にある。私たちが今日、心を注いで対処すべきことはしっかりとあるのです。だからそのことに集中して、明日については明日にまた新しい恵みをくださる神の御力に信頼し、毎日を過ごすべきであるということです。

このように今日の34節は、私たちにより具体的な励ましを与えてくれる御言葉です。明日以降のことは、また明日以降、恵みをくださる神に信頼して委ねなさい！と。言い換えれば、私たちは恵みをため込もうとせず、日ごとに神に信頼するようにと招かれているのです。このことで思い起こすのは出エジプト記におけるマナの記事ではないでしょうか。イスラエル人はその日の分を取りなさい！と言われたのに、ある人々はもしこのパンが明日降らなかったら、荒野でどうやって生活していくかと心配し、次の日の

分もひそかに集めて隠し持っていました。しかしそれは翌日にはうじがわいて悪臭を放ち、食べられるどころではありませんでした。それは彼らの不信仰の現れでした。私たちも同じではないでしょうか。明日について心配するのは、もし神が明日恵みをくださらなくともやっていける基盤を作つておきたいと考えているからではないでしょうか。神がおられなくても、あるいは神にいちいち頼らなくても、大丈夫な状態を整えておきたい。そういう意味で「心配」は「不信仰」と一つにつながっています。しかしイスラエルの心配をよそに、天からのマナは約束通り、毎日彼らの上に降り、彼らの生活を支えました。つまり神は恵みを日ごとに新しく与えるのです。私たちも同じように考えるべきだと思います。明日にはまた明日の神の恵みがある。もし明日何か大きな問題が起るなら、それに対処するための新しい恵みを神は明日与えてくださる。だから私たちは、今日のうちから明日のことを心配することはしない。私としては今日という日を、神により頼んで精一杯歩むことに向かって行けば良い。そう考えるとこの御言葉は私たちに毎日毎日、新しい希望と大きな励ましを与えてくれる約束となります。

明日のことは明日が心配する。今日を支えてくださっている神は、明日も私たちにフレッシュな恵みを用意していてくださる。そういう意味で私たちが信じていることは、単に「明日は明日の風が吹く」ということでなく、「明日は明日の新しい神の風が吹く」ということです。私たちはこの神に信頼し、感謝して、今日の苦労の上に神の恵みを祈り求めたいと思います。そのことにおいて神の国と神の義をまず求める歩みへ向かうことができますように。そうして日ごとに新しい恵みを授けてくださる神の真実を味わい、日ごとに神を喜び、その神の愛に応答する最も幸いに歩みに進みたいと思います。